

## 石見相聞歌における「夏草」と「露霜」

塩沢 一平

### 一 はじめに

二群の長反歌からなる石見相聞歌は、現在でもさまざまに解決されていない問題を孕んでいる。大きな問題としては、二群をそれぞれA（巻2・一三一―一三三）・B（一三五―一三七）とすると、このABは、構成上、次の三説が現在でも鼎立している。すなわち①AからBへと時間・空間的に進行していくという賀茂真淵以来の通説、②BはAの中に収まる「求心的構図」をとるとする説、③AとBとは視点を交えて同じ場面を詠んだ「同時・並行の構図」をとるとする説<sup>②</sup>である。

また、「露霜の 置きてしくれば」や「夏草の 思ひ萎えて」といった枕詞と被枕詞とが連合することによって、何を形

象化しようとしているのか、さらに、枕詞といえども、「露霜の」「夏草の」という季を異にするように考えられるこの二つの表現が混在する意味も、定説をみているとはいえない。い。

さらにA群第二反歌「小竹の葉は……」の「乱友」の訓みなど、一首の解釈も定まっていとはいえない。

この石見相聞歌については、渡瀬昌忠氏による一連の精力的な成果がある。また多田一臣氏は、語句の一つ一つを丁寧に検証し解釈を定め、その解釈を組み上げた詳細な石見相聞歌論を世に示している<sup>④</sup>。さらに川島二郎氏による枕詞を中心とした詳細な検考がある<sup>⑤</sup>。本論は、これら諸氏の成果をふまえつつ、人麻呂歌集や『文選』との関連を考え、特に「夏草の」と「露霜の」との二点について論じていく。

二 夏草の思ひ萎えて

人麻呂の「石見相聞歌」は、妻から別れ都に去っていくという設定の歌であるが、対応する二群に分けられる。この二群の時空関係は、「一 はじめに」で示したように三説鼎立している。このうち、③の時空が「同時・並行の構図」をとるという橋本達雄氏の説は、二群の長歌一三一と一三五とを対応する部分に分け、五つの部分に分けて分析している。菊川恵三氏が述べるように「二つの歌群、中でも長歌を比較するにあたって最も見やすい」比較である。時空の問題は、ひとまず棚上げにして、左のように二群の長歌を「1 石見の描写がある」→「5 4を承けて高潮した感情の表白で閉じる」と五つの対応部分で分けた橋

本説の対応構造を検証してみよう。

一三一から一三三までの長反歌（Aとする）と一三五から一三七までの長反歌（Bとする）と、ABの長歌は、それぞれ1→5の対応する部分に分けることができる。

- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1 | 石見の海岸の描写がある                 |
| 2 | 海藻を序として妻との共寝を描き、別れて来たことを述べる |
| 3 | 妻に対する顧みが歌われる                |
| 4 | 山を越えてきたことを歌う                |
| 5 | 4を承けて高潮した感情の表白で閉じる          |

A

B

1  
 石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ  
 渴なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも  
 よしゑやし 渴は無くとも 鯨魚取り 海辺を指して  
 和多津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻  
 朝はふる 風こそ寄せめ 夕はふる

1'  
 つのさはふ 石見の海の 言へさく 韓の崎なる  
 海石にぞ 深海松生ふる 荒磯にぞ 玉藻は生ふる

浪こそ来寄せ

2 波の共 か寄りかく寄る

玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば

3

この道の 八十隈毎に 万たびかへりみすれど

4

いや遠に 里は放りぬ いや高に 山も越え来ぬ

5

夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が門見む

靡けこの山

(一三二)

反歌二首

石見のや高角山の木の際より

わが振る袖を妹見つらむか

2'

玉藻なす 靡き寐し児を 深海松の 深めて思へど  
さ寝し夜は いくだもあらず 這ふ蔦の 別れし来

れば

3'

肝向かふ 心を痛み 思ひつつ かへりみすれど

4'

大船の 渡の山の 黄葉の 散りの乱ひに  
妹が袖 さやにも見えず 嬌隠る 屋上の山の  
雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠るひ来れば  
天つたふ 入日さしぬれ

5'

大夫と 思へるわれも 敷栲の 衣の袖は  
通りに濡れぬ

(一三五)

反歌二首

青駒の足搔を早み雲居にそ

妹があたりを過ぎて来にける

小竹の葉はみ山もさやに乱げども  
われは妹念ふ別れ来ぬれば

(一三二)

(一三三)

わかりやすい2と2'の部分を見てみると、2'の「玉藻な  
す 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば」と2「玉藻  
なす 靡き寐し児を 深海松の 深めて思へど さ寐し夜  
はいくだもあらず 這ふ蔦の 別れし来れば」とは、「玉  
藻なす」が全く同じ表現である。加えてこの部分の最後の「露

A

I 「石見の海」く「浪こそ来寄せ」

序にあたる部分

II 「浪の共」く「山も越え来ぬ」

妻との別離を述べた主想部

III 「夏草の」く5 「靡けこの山」

結びにあたる部分

秋山に落つる黄葉しましくは  
な散り乱ひそ妹があたり見む

(一三六)

(一三七)

霜の 置きてし来れば」と「這ふ蔦の 別れし来れば」とは、  
「露霜の」と「這ふ蔦の」が枕詞となっており、「置きてし  
来れば」と「別れし来れば」も類句となっている。3と3'は、  
ともに「かえりみすれど」という表現となっている。  
多田一臣氏は、二群の長歌を

B

I 「つのさはふ」く「玉藻は生ふる」

序にあたる部分

II 「玉藻なす」く「入日さしぬれ」

主想部

III 「大夫と」く「通りて濡れぬ」

結びにあたる部分

のように分けている<sup>8)</sup>。橋本・多田両論は、五つに分けるか  
三つに分けるかの違いと、句の微妙な違いはあるものの、

対応関係は近似している。橋本論を例として取り上げて行  
くならば、二群AB長歌の1く5までの分け方と対応は、

ひとまず受け入れられよう。

さて、この石見相聞歌は、「一 はじめに」で少しく触れた「露霜」と「夏草」に関連して、二群の詠まれた背景となる季節が a 秋であるという説と b 夏であるという二説がある。

a は稲岡耕二氏に代表される説である。稲岡『全注』では、「夏草」という語は「夏草の茂きはあれど」(9・一七五三)、「夏草の刈り掃へども生ひしくごとし」(10・一九八四)「夏草の刈り除くれども生ひしくごとし」(11・二七六九)などのように、蓬々と生ひ茂った状態を歌ったものであり、万葉以後の枕詞も「夏草のかりそめにとて」(新古今 5・五四七)「夏草のしげきおもひは」(新勅撰 12・七〇九)のように、夏草の茂りや刈ることを被枕詞とする。古今に「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ」(二四九)とあるように、夏草が萎れるのは秋であり、「露霜の」などから推測されるように、歌われている季節は秋であり、共に過ごした夏の間、生き生きとよるこびにあふれていた状態と、今別れてきたのちにおそらくしょんぼりと生気を失っているであろう状態とが二重写しになって想像される<sup>9)</sup>としてゐる。

一方 b の「夏」説はさらに、細かく①③の三説に分か

れる。「代匠記」(精撰本)に

夏ノ日盛ニ草ノヨラレテナヨナヨトシホルルヲ、歎ア  
ル人ノ物思フ時、心モヨハリ身モウナタルルニ譬タリ。  
とあるように b ①「夏草が夏の酷暑によつて萎れる」とする説。

二番目は、真淵の『冠辞考』による「こは夏草はまだ弱ければ、なよやかにうなだるるを、人の物おもひする時のさまにたとへたり」という、b ②「夏草がまだ弱いのでしおれる」とする説。そして三番目は、渡瀬昌忠氏の b ③「夏の異常気象・異変ともいふべき露霜によつて夏草がしなえる」という説である<sup>10)</sup>。

いったいどの考えが蓋然性が高いのであろうか。

### 三 「夏草」と「露霜」

「夏草」が蓬々と生ひ茂るものであることは、稲岡氏による具体的な万葉の用例の指摘にあるように、まず頷かれよう。この点は b 説をとる渡瀬氏も万葉の「夏草の刈り掃へども生ひしくごとし」(10・一九八四)「夏草の刈り除くれども生ひしくごとし」(11・二七六九)などの同じ例を引いて、

「夏草」は刈り払っても刈り除いても「生ひしく」[繁]きものとして歌われるものであつて、その本性におい

て「まだ弱ければ、なよよかにうなたるる」などと言えるものではない<sup>11)</sup>

と認めている。

なお、この渡瀬説によつて、b②の真淵説は、ひとまず論の外に置いて良いだろう。さらに、渡瀬氏は、稲岡氏と同じ「吹くからに秋の草木のしをるれば」の例や家持の「秋草に置く白露の」(20:四三二二)から、現在が秋ならば、「秋の草木」「秋草」と表現せねばならないとa説を否定する。しかし渡瀬b③説にも従えない点が残る。渡瀬氏は

人麻呂の石見相聞歌の「夏草の思ひ萎へて」を、通説に従つて夏の日盛り、その酷暑によるものと解すると、同じ長歌の「露霜の置きてし来れば」という表現のもつ寒さ冷たさとの間に感覚上の矛盾が生じる。<sup>12)</sup>

とする。そしてこの矛盾の解決法として、b③の「夏の異常気象・異変ともいふべき露霜によつて夏草がしなえる」という説を打ち出した。

確かに「露霜」は、「妻ごもる矢野の神山露霜ににほひ始めたりちらまく惜しも」(10:二二七八 非略体歌)「秋萩は露霜負ひて散りにしものを」(8:一五八〇 文忌寸馬養)「露霜に逢へる黄葉を手折り来て」(8:一五八九 秦許遍麻呂)とあるように「山の木の葉を色づかせ、花や葉を散らす原因と

して表現されており、「その『露霜』が夏の旅路に『置く』ならば、『夏草』を『萎え』させる原因となるはずである<sup>13)</sup>」。

だが、渡瀬氏が現にあげた例は、「秋萩は」「黄葉」と取り合わせて詠まれるように、「露霜」が秋の景物であること、を、逆に示すことになるのではないだろうか。

ところで、「夏草の 思ひ萎えて」は、集中もう一例見られる。同じ人麻呂の「明日香皇女挽歌」(2:二九六―一九七)の長歌の中である。

石見相聞歌と同じように「玉藻」のように馴れ親しんだ皇女が、夫君を捨てて亡くなったことをことに対する「哀惜のくどきの部分」(伊藤博『万葉集釈注』)に続く後半の部分で、「ぬえ鳥の 片恋嬌」から「大船の か行きかく行き」までの「枕詞+被枕詞」を四回重ねることによつて、妻を亡くした夫忍壁皇子の傷心のさまを丁寧に叙した部分に、「夏草の 思ひ萎えて」は、登場する。

この挽歌には、歌われた季節を殊更強調する表現は見られない。だが、皇女は、文武四年四月四日に没していることから、題詞にあるような「城上の殯宮」は、ひとまず夏に設営されたものと考えられよう。

川島二郎氏は、「夏草の 思ひ萎えて」が詠み込まれている明日香皇女挽歌に、稲岡・渡瀬説が石見相聞歌で関連づ

けられていた「露霜の」やそれに類する語句が詠み込まれていないことなどから考えて、両説には無理があるとした。「夏草の 思ひ萎えて」は、秋でなく夏に、強烈な日差しが生命力豊かな夏草を萎えさせるもので、それによつて「夏草」のように生命力が充溢していた石見妻が、一挙に「思ひ萎え」てしまった悲嘆の激しさを表現したものであるとした。<sup>16</sup>川島氏の論は集中の「夏草」の用例を丁寧に近い、「春花の移ろひ」などというプラスイメージの枕詞にマイナスイメージの被枕詞が接続する例などとの比較を行うなど、詳細なものであり、「夏草の」と「思ひ萎えて」とが、落差が大きいものであることを丁寧に検証している。

ところで、明日香皇女挽歌と石見相聞歌の先後関係はどうかであろう。石見相聞歌には、正確な作歌年代は記されていない。

つとに言われるように、石見相聞歌は、宮廷サロンに要請されて作成された余技的作品であるとするならば、その制作年代は、人麻呂の宮廷歌作成時期と重なる。つまり、持統四年から文武四年の間となる。

さらに、稲岡耕二氏は、人麻呂作歌における反歌のうち、「短歌」とされるものは、持統六年以後であることなどを拠り所として、「反歌」と頭書される石見相聞歌を、持統朝前

半のものであると年代を絞り込んでいる。<sup>16</sup>

一方明日香皇女挽歌には、他の人麻呂作歌に見られる表裏がちりばめられている。例えば、吉野讚歌によつて創始されたと考えられる「見れども飽かず」が用いられる。また泣血哀慟歌と同様に「うつそみと思ひし時」によつて前段の内容を転換し歌い起こし、「長い人麻呂の作歌生活を総集するかのごとき相貌を持」つ作品といわれる。<sup>17</sup>

表現から見ても先後関係は、如上のように、明日香皇女挽歌が、石見相聞歌の成立後の作と考えられる。柿本人麻呂は、石見相聞歌で試みた「夏草の 思ひ萎えて」というイメージの落差が大きい枕詞と被枕詞とを再び明日香皇女挽歌に用いた。「夏草の 思ひ萎へて」は、皇女を失つて悄然としている忍壁皇子の様子を強調しようという叙法であるといえるだろう。

そもそも石見相聞歌のAの長歌一三一は、その詠まれている内容の季を、枕詞によつて、「夏」「秋」のどちらかに確定する必要があるのであろうか。

Bの長反歌には「黄葉の 散りの乱ひに」(二三五)、「秋山に落つる黄葉」(二三七)と、枕詞でない秋のイメージがちりばめられている。仮に、石見相聞歌の生成がBをもとにAが作られたものである、或いは、Aが同時連作とさ

れるならば、Bからの影響も顧慮されねばならない。

石見相聞歌の生成過程は、伊藤博氏によると、まず、Aの或本歌である一三八・一三九が披露された。そして、これにBの初案が加わりABの二群（一三一の一云＋一三四、一三五＋一三七の一云）をなす形に推敲され、さらに現在のABの二群となった。この考えが広く知られている。<sup>18</sup> また、神野志隆光氏は、もともとAの或本歌から、それが推敲された一三一の一云＋一三四が一首構成として完結した。それにB系統としての二首目加わり、現在の形に推敲されていったとの考えを示している。<sup>19</sup> 成立過程に違いがあるものの、いずれもAがBに先立ち成立したものと考えられている。このA長歌の或本歌であり、Aに先立って、最初に披露されたと考えられる一三八の長歌には、すでに「露霜の置きてし来れば」と「夏草の思ひ萎えて」の両方が詠み込まれている。したがって、Bの季を根拠にAの季を定めることはできないこととなる。やはり、A長歌は季の統一を考慮したものでなかったのではないか。これをどちらかの季に重ねようとすることによって、aの稲岡案もb③の渡瀬案にも無理が生じたのではなからうか。繰り返すようだが、そもそも「露霜の」も「夏草の」も比喩的な枕詞であり、直接Aの季を規定するものではない。

両枕詞のこの作品内での表現効果なり記号性を明らかにすることの方が、作品の有効な解明につながると思えられよう。そして、その記号性を解くかぎは、以下に述べるように『文選』にあると考える。

#### 四 人麻呂と『文選』

『文選』は六世紀前半に成立した中国の詩文集で、周の時代から梁の時代までの著名な詩文を収めたものである。この『文選』は、広く知られるように、『万葉集』が詠まれた時代には、必須の教養として官人たちが学んでいた作品である。この『文選』から『万葉集』は、文字・表現・発想に至るまで、さまざまな影響を受けていた。なぜならば、万葉集の作り手である歌人の多くが、『文選』を享受する官人層であったからである。石見終焉説は、認められないにしても、人麻呂は、辺境石見に赴任した経験をもつであろう官人であった。

「石見相聞歌」と『文選』との関係は、早く谷馨氏や中西進氏が、陸士衡行旅詩「赴洛二首」・「赴洛道中作二首」との発想の類同性を指摘した。<sup>20</sup> また、吉田とよ子氏は、江淹（江文通）の「別賦一首」や「古離別」と、石見相聞歌の妹の描写との類似性を指摘している。<sup>21</sup>

古離別

遠與<sub>レ</sub>君別者 乃至<sub>二</sub>鴈門關<sub>一</sub>

遠く君と別るる者あり 乃ち鴈門の關に至らん

横雲蔽<sub>二</sub>千里<sub>一</sub> 遊子何時還

横雲千里を蔽ひ 遊子何の時にか還らん

送<sub>レ</sub>君如<sub>二</sub>昨日<sub>一</sub> 簷前露已團

君を送ること昨日の如くなれど 簷前露已に團かなり

不<sub>レ</sub>惜<sub>二</sub>蕙草晚<sub>一</sub> 所<sub>レ</sub>悲道里寒

蕙草の晩るるを惜しむにあらず 悲しむ所は道里の寒きこ

と

君行在<sub>二</sub>天涯<sub>一</sub> 妾身長別離

君は行きて天涯に在り 妾が身は長く別離せり

願<sub>三</sub>一見<sub>二</sub>顔色<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>瓊樹枝<sub>一</sub>

一たび顔色を見んことを願へども 瓊樹の枝に異ならず

菟絲及<sub>二</sub>水萍<sub>一</sub> 所<sub>レ</sub>寄終不<sub>レ</sub>移

菟絲と水萍と 寄する所は終に移らず<sup>(22)</sup>

吉田氏によれば、右のように、「簷前」(軒下)の「露」に弱る「蕙草」(香り草)が、1Aの「三三」の「露霜」と「夏草」に類似し、「菟絲及水萍」所<sub>レ</sub>寄(日陰の葛と浮き草

が、いつまでも身を寄せる所)は「玉藻沖つ藻」が寄ることと類似するという。イメージが重なるようにも理解できるが、古離別は、「露」のみである。また、「夏草」ではなく「蕙草」が衰えるという内容である。類似性を指摘することは不可能ではないだろうが、より関係性が深い資料は別にある。

これらの指摘以外にも、私見に寄れば、石見相聞歌と関係が深いと考えられる『文選』詩がある。それは、次に示した王粲(王仲宣)作の「従軍詩五首」(卷二十七)の第三首である。カッコ内には対応する李善注を加えた。

従軍詩五首 王仲宣(第三首)

従<sub>レ</sub>軍征<sub>二</sub>遐路<sub>一</sub> 討<sub>二</sub>彼東南夷<sub>一</sub>

軍に従ひて遐き路を征き 彼の東南の夷を討たんとす

方<sub>レ</sub>舟順<sub>二</sub>廣川<sub>一</sub> 薄暮未<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>抵

舟を方べて廣川に順ひ 薄暮にも未だ抵に安んぜず

白日半<sub>二</sub>西山<sub>一</sub> 桑梓有<sub>二</sub>餘暉<sub>一</sub>

白日は西の山に半ばにして 桑梓に餘の暉有り

(古歩出夏門曰、行行復行行、白日薄西山。桑梓、二木名也。餘暉、言將夕也。)

蟋蟀夾<sub>レ</sub>岸鳴 孤鳥翩翩飛

蟋蟀は岸を夾みて鳴き 孤鳥は翩翩として飛ぶ

征夫心多<sub>レ</sub>懷 悽愴令<sub>二</sub>吾悲<sub>一</sub>

征夫心懷多し 悽愴として吾を悲しましむ

(礼記曰、霜露既降、君子履之必有悽愴之心。)

下<sub>レ</sub>船登<sub>二</sub>高防<sub>一</sub> 草露沾<sub>二</sub>我衣<sub>一</sub>

船より下りて高防に登れば 草露我が衣を沾す

(説文曰防、堤也。春秋元苞曰、露所以閏草。説苑曰、孺子不

覺露之沾衣。)

迴<sub>レ</sub>身赴<sub>二</sub>牀寝<sub>一</sub> 此愁當<sub>レ</sub>告誰

身を迴らして牀寝に赴く 此の愁ひ當に誰にか告ぐべき

身服<sub>二</sub>干戈事<sub>一</sub> 豈得<sub>レ</sub>念<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>私

身は干戈の事に服へり 豈私する所を念ふを得んや

即<sub>レ</sub>戎有<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>命 茲理不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違

戎に即きては命を授ぐる有り 茲の理違ふ可からず

例えば、石見相聞歌1Bの4'部分「雲間より 渡らふ月

の 惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ 入り日さしぬれ」

は、右の第五句目「白日半西山」(輝く日も、西の山に懸かっ  
て半円となり)と非常に似通った表現になっている。また、

石見相聞歌1Bの5'部分「大夫と 思へるわれも 敷栲の  
衣の袖は 通りに濡れぬ」は、従軍詩の第九句から第十

句「征夫心多懷 悽愴令吾悲」(國うちでた武士は、胸内に思う  
ことが多く、痛ましくも、我が心を悲します)と第十二句「草  
露沾我衣」(草葉の上の露が、我が衣を湿らせていく)を合わせ  
て縮めたような表現になっていることがわかる。

石見相聞歌のBが「従軍詩」に着想を得たものであると  
するならば、5'の部分は、「大夫と 思へるわれ」、つまり  
強い男であると思っている私の「敷栲の 衣の袖」は「悽愴」  
つまり妻との別れによる痛いほどの哀しみによって「通りに  
濡れぬ」、すなわち涙でぐっしり濡れてしまう。このよ  
うに細かく理解することが可能になるのではないだろうか。  
ところで、A5「夏草の 思ひ萎えて」は、「三」で示し  
た川島氏が述べるように、生命力あるものが一挙に悄然と  
してしまふ、妹の悲嘆の激しさを表現したものと理解でき  
た。Aの5に対応するBの5'は、われを主体とするものの、  
非常によく似た内容を述べたものとなっていることが理解  
できよう。とすると、A・Bが揃った石見相聞歌の最終段  
階において、5は、「大夫」と同様に、繁殖力ある強い「夏  
草」が萎れるように「しょんぼりとして」いる様子に、「悽  
愴」と同様に強い痛ましさを感じているのだと理解できよ  
う。だが、「三」で先述した、石見相聞歌の生成過程から鑑  
みると、これは逆立ちした理論となる。初案となるAの或

本歌にすでにみられた「露霜」と「夏草」との関係を、後から加わったB系統で説明することになるからである。現在あるかたちからの説明以外の合理的な考えが必要になる。このことと、「夏草」が萎えることの「強い痛ましさ」については、次に語ることにする。

## 五 「石見相聞歌」と李善注『文選』

ところで、「従軍詩五首」を含む『文選』は、周知のように李善注『文選』という形で、『万葉集』の時代には享受されてきた。万葉の時代の人々は、『文選』を単なるテキストとして読んでいたのではなく、いわば解説付きの受験参考書をまるまる読んでいたことになる。先の「従軍詩五首」のカッコ内に示したものが、李善が注した部分であった。

李善注『文選』と「石見相聞歌」の関係の深さは、すでに渡瀬昌忠氏に指摘がある。先にも「四」で石見相聞歌と関係があるものとして取り上げられていた陸士衡の「赴洛二首」である。このの第一首目の十三句・十四句目「南望泣玄渚<sup>一</sup> 北邁涉<sup>二</sup>長林<sup>三</sup>」（南のかた望みて玄渚に泣き 北のかた邁きて長林を渉る）の下に李善は「西京賦曰、海若游<sup>レ</sup>於玄渚<sup>一</sup>」と注している。「西京賦」のこの部分には「鯨魚失

流蹠<sup>レ</sup>蹠<sup>レ</sup>」が続いている。A1「鯨魚取り」の枕詞は、「鯨魚失<sup>レ</sup>流蹠<sup>レ</sup>蹠<sup>レ</sup>」とかかわると述べている。その他詳細に李善注と「石見相聞歌」との関わりを細かく指摘しており、渡瀬氏の説は従うべきものと考えられる。

さて、「四」でその対応を指摘したように、石見相聞歌5・5'に対応すると考えられる「従軍詩五首」の第九句から第十句「征夫心多懷 悽愴令吾悲」の「李善注」を見ると、「礼記曰、霜露既降、君子履之必有悽愴之心」と述べられていることがわかる。「悽愴之心」は、「霜露」を踏むことによつて起こると注されている。この「霜露」は、まさにAの「露霜」を連想させるものである。

この「霜露」と「露霜」とに関して、小島憲之氏にも指摘がある。小島氏は、和語の「つゆしも」は、漢語の「霜露」が天下りに潤色して用いられたのではないとした。その裏側には、類似のものを表現しようという心がすでにあり、それが外来文学を見ることによつて触発されて万葉語「露霜」となった。このような文脈の中で左のように述べている。やや長くなるが、引用してみよう。

詩語「霜露」と歌語「露霜」との借用関係は如何に。時代的に見れば枕詞ではあるが「つゆしもの」は人麻呂の造語であり最も古いものと思はれる。露や霜が置

き或は消えることは漢語によらないでも容易に観測できるものであるが、短歌としては五言七言に制約され、歌の中に用ゐるためには露或は霜だけでは何にもならない。従つてそれを歌として表現する為には他の糧を必要とするわけである。あたかも詩語として妻々用ゐられてゐる同義語の「霜露」があり、これが表現へと至る直接の火花（触撥物）となつたのではあるまいか。人麻呂の枕詞「つゆしもの」から普通名詞の「つゆしもの」が生まれたとは限らない、むしろ人麻呂の「つゆしもの」の表現の過程には既に詩語「霜露」が溶けこんでゐたのではなからうか。

5に見られた「露霜」は、「露」や「霜」もつ、「置く」「消える」といった和語のイメージの共通性から、これらにかゝる枕詞「つゆしもの」として熟語化したかたちで人麻呂によつて創造されたというのは穏当ではない。小島氏のいうように、「露霜」と熟語化して和歌世界の中で表現される。それが枕詞といった和歌の五音として表現されるとき、漢語の「霜露」がすでに、柿本人麻呂の脳裏にあつたことは間違いないだろう。

李善注『文選』という形で、石見相聞歌への影響を考え直してみると、「従軍詩五首」は、B系統が加わる時に初

めてそこから着想を得たものではないと考えられる。すでにA制作時に、李善の「注」を含めた形で、柿本人麻呂の意識にあつたものと考えられるのではないか。

したがつて、「四」で示した、「強い痛ましさ」、つまり生命力溢れる「夏草」を「萎え」させることによる「強い痛ましさ」、これを感じさせる原因は、草木を萎れさせる「露霜」にあつたのではないか。「夏草」と「露霜」との季の不統一感は、李善注『文選』に着想を得た世界を表現したためであり、「夏草」「大夫」という力強いものが萎れたり涙をぐつしより流してしまふという落差の大きさを、人麻呂は表現しようとしたのだと考えるべきではないだろうか。

## 六 人麻呂歌集与李善注『文選』

次に、石見相聞歌の解釈に大きく影響を及ぼすと思われる人麻呂歌集略体歌について考えていきたい。

万葉集卷十一の柿本人麻呂歌集略体歌に左のような歌がある。

行々不相妹故 久方 天露霜 沾在哉（11 二三九五）

行き行きてあはぬ妹ゆゑひさかたの天の露霜（天露霜に）  
沾れにけるかも

この歌の「行行」部分の訓みと解釈についても、やはり渡瀬昌忠氏に詳細な論考がある。<sup>25)</sup>

この歌の初句「行行」の部分は、①「行き行けど」②「行き行きて」というに二つの「訓み」の可能性がある。渡瀬氏は、このうち、①は人麻呂歌集略体歌の逆接を表す「雖」が本文にないことから誤訓であることを示した。次に「行行」の方向性を、a 私は妻の所へすすんで行きまたすすんで、近づいて行く（しかし妻は私に会ってくれない）、b 私は妻の所からすすんで行きまたすすんで、遠ざかっていく（だから私は妻に会えない）という二つの解釈について『文選』の「行行」の用例を詳細に検討しながら、bの解釈が正しいことを示した。

その「行行」のうち『文選』本文に見られる「行行」は、左のように十例である。

- 1 固行行其必凶兮、免盜亂爲頼道（卷14班固「幽通賦」）
- 2 戚戚多遠念 行行遂成篇（卷24陸機「答張士然」）
- 3 行行道轉遠 去去情彌遲（卷25謝惠連「西陵遇風賦康樂」）
- 4 行行遂已遠 野途曠無人（卷26陸機「赴洛道中作二首」）
- 5 行行日已遠 人馬同時飢（卷27魏武帝「苦寒行」）

- 6 行行日已遠 遂造匈奴城（卷27石崇「王明君詞一首」）
- 7 行行將復去 長存非所嘗（卷28陸機「齋謳行」）
- 8 行行重行行 與君生別離（卷29古詩十九首）
- 9 行行人幽荒 歐駱從祝髮（卷29張協「雜詩十首」）
- 10 行行鄙夫志、悠悠故難量（卷56崔瑗「座右銘一首」）

「行行」は主に（1）「剛強な様子」（2）「すすんで行きまたすすんで行く様子」の意味がある。このうち1と10は（1）の意味である。残りの2〜9は、2が、張士然から贈られた詩に対して、陸機が行幸に侍従して出遊したときに答えた歌。遙か故郷へ向かう思いを、同郷の友へ漏らす詩である。「戚戚多遠念」とあるように、遠くはなれて行く意味となっている。また、3は、恵連が都への途中、浙江省の西陵湖で暴風雨にあつて船をとどめていたとき、謝靈運に贈ったもので、「行行道轉遠」とあるように、これも紛れもなく遠くはなれて行く意味となっている。以下4〜9いずれも渡瀬氏の指摘のように、「行行」は離れていく場合に用いられている。

万葉二・三九五番歌の訓みと解釈を定めるにあたって、渡瀬氏は、先の「従軍詩」と李善注にも注目した。例えば第一句「従軍征遐路」について、まず字書の「遐」は「遠」「征」

は「行」の意であることを利用した。つまり「征遐路」は「行遠路」と同じことになる。これが「行行」とも同じ意味であることは、李善が引いている「古歩出夏門行」の詞句の語るところで、第5句「白日薄西山」が「古歩出夏門行」の「白日薄西山」に通じる以上、「征遐路」もまた「行行復行行」に通じると述べる。

また、二三九五の「行き行きて」妹に「あはぬ」男は、それ「ゆゑ」に、夕刻に置く「天の露霜」に「沾れにけるかも」と嘆くのであるが、それは李善の引く札記に通じる。つまり「霜露」を「履」んで「悽愴之心」をいやくことに通じ、「悽愴」を「悲」しんで、「草露」に「我が衣を沾」らす「征夫の心」に等しいことを指摘した。そしてこのように理解すると、二三九五は「李善注の文選の『従軍詩』第三首を踏まえた作品であろうと思われる」とし、

人麻呂歌集略体歌の「行行」は、単にその表記を文選（李注）から借りているにとどまらず、李善注によって文選の「従軍詩」や「古詩」を読むことの中から、その歌の発想や表現を得ているのである<sup>26</sup>。

と論じているのである。

当該石見相聞歌には、「行行」の句はない。しかし、「五」で示したように、二三九五同様、「従軍詩」が李善注を含め

た形で着想のベースとなっていた。しかも第五句目「白日薄西山」は「四」で先述したように、すでに二三九五同様に石見相聞歌と似通った表現であった。とするならば、柿本人麻呂の脳裏には、注された「古歩出夏門行、行行復行行、白日薄西山」があつたと考えられよう。

「行行」が表す「すすんで行きまたすすんで、遠ざかっていく」ものは、まさに石見相聞歌における、我が妹から別れて遠ざかっていく内容ということになるだろう。「妻に対する顧みが歌われる」石見相聞歌の3の部分、Aが「この道の八十隈ごとに 万たび かえりみすれど」遠ざかっていく距離感が感じられるのに対しBは、「肝向かふ 心を痛み 思ひつつ かへりみすれど」とそれが感じられない。「山を越えてきたことを歌う」続く4も、Aは、ストリートに「いや遠に 里は放りぬ いや高に 山も越え来ぬ」と離れて行き行くことを歌っているのに対し、Bは、「四」で前述したように「従軍詩」と類同する表現を持つにもかかわらず、「さやにも見えず」「隠ろひ来れば」と妹の姿が見られないことに重きが置かれている。つまり「従軍詩」李善注は、Bを待たずして、すでにAの制作時に、柿本人麻呂の脳裏に深く印されていたものと考えられよう。

## 七 結論

以上「二〇六」までの詳しく検討してきたことから、結ばれる内容は以下のようになる。

柿本人麻呂の石見相聞歌A・B群は、ともに『文選』の影響を、李善注を含めて受けていた。特に王粲（王仲宣）作「從軍詩五首（第三首）」の影響を、李善注を含めて顧慮することによって、両群の対応する部分の解釈や、一見季に不統一があるかのように感ぜられる「夏草の」・「露霜の」といった枕詞の形象化する世界が、明確になると考えられる。つまり、

(1) 石見相聞歌A群長歌一三一中の「夏草の 思ひ萎えて」(A-5波線部)は、実際の季節を直接反映した表現ではなく、詩的世界において「繁殖力ある強い『夏草』が、『露霜』によって一気に萎れるように」妹が悄然としている悲嘆の激しさを表現する機能を果たしているものである蓋然性が高い。それは、対応するB群「大夫と 思へるわれも 敷栲の 衣の袖は 通りて濡れぬ」部分分が、主体を男性としての我に変え、「大夫」たる強き男が、「衣の袖は 通りて濡れぬ」と悄然と悲嘆する」という落差を表していることにもつながっている。

(2) 石見相聞歌A群長歌一三一中の「露霜の 置きてし来れば」(A-2傍線部)には、人麻呂歌集略体歌

行き行きてあはぬ妹ゆゑひさかたの天の露霜沾れに  
けるかも(11-1395)

と同様に、『文選』李善注部に見られる「行行」の「ど んどん遠ざかっていく」イメージが組み込まれている。これを顧慮することにより、「露霜の 置きてし来れば」という部分は、「露や霜を置くように愛する妹を遠くに置き去りにして来たので」と理解するのが穏当である。このように考えられるのではないだろうか。

### 【注】

- (1) 伊藤博「石見相聞歌の構造と形成」(『万葉集の歌人と作品上』一九七五年) 初出一九七三年五月。
- (2) 橋本達雄「石見相聞歌の構造」(『万葉集の作品と歌風』一九九一年) 初出一九七七年六月。
- (3) 「柿本人麻呂の石見歌」(『渡瀬昌忠著作集 第七卷 柿本人麻呂作品論』第四章 二〇〇三年) などに詳しい。
- (4) 「石見相聞歌」(『万葉歌の表現』一九九一年) 初出一九八八年三月。

- (5) 「敷栲の衣の袖は通りて濡れぬ」(『山辺道』第三二号 一九八八年三月)、「夏草の思ひ萎えて」考(『山辺道』第三三三号 一九八九年三月)、「露霜の置きてし来れば」考(『山辺道』第三五号 一九九一年三月) など。
- (6) 前掲(2)。
- (7) 「石見相聞歌―二つの歌群の時間と意識をめぐって―」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九八年八月号)。
- (8) 前掲(4)。
- (9) 「人麻呂の枕詞について」(『万葉集研究』第一集)、稲岡耕二『万葉集全注 卷第二』(一九八五年)。
- (10) 「人麻呂の石見相聞長歌第一編」(『渡瀬昌忠著作集 第七卷 柿本人麻呂作品論』二〇〇三年 初出一九八六年二月)、「万葉一枝」(『渡瀬昌忠著作集 補卷 万葉学交響』(二〇〇三年 初出一九九五年十月)。
- (11) 前掲(10) 「万葉一枝」。
- (12) 前掲(10) 「万葉一枝」。
- (13) 前掲(10) 「万葉一枝」。
- (14) 前掲(5) 「夏草の思ひ萎えて」考。
- (15) 前掲(1)。
- (16) 稲岡耕二「石見相聞歌と人麻呂伝」(『万葉集の作品と方法』一九八五年 初出一九八〇年)。
- (17) 橋本達雄「謎の歌聖 柿本人麻呂」(一九八四年)。
- (18) 前掲(1)。
- (19) 「石見相聞歌論」(『柿本人麻呂研究』一九九二年)。
- (20) 谷「万葉集歌と中国韻文」(『万葉集大成』七卷 一九五四年)、中西「人麻呂と海彼」(『万葉論集』第一卷 第五章 一九九五年 初出一九六二年七月)。
- (21) 吉田とよ子「柿本人麻呂の空間・時間意識―漢・六朝の賦詩との関連において―」(『上代文学』四十二号 一九七九年四月)。
- (22) 訓み・日本語訳は、花房英樹『文選』(全釈漢文大系)に従う。以下も同じ。
- (23) 「人麻呂と漢文学」(『渡瀬昌忠著作集 第七卷 柿本人麻呂作歌論』第四章 第四節二〇〇三年三月 初出一九八六年九月)。
- (24) 「万葉人の庖厨に漢籍あり」(『国語国文』一二七号 一九五三年六月)。
- (25) 「訓読漢字による歌の表記」(『渡瀬昌忠著作集 第一卷 人麻呂歌集略体歌論上』第一章 第二節 二〇〇二年九月 初出一九八八年八月)。
- (26) 前掲(25)。